

洋食、洋服の社会浸透 女性の社会進出の素地は 戦時中につくられた

戦後の日本社会には、戦争や軍隊に対する強い忌避感が存在していました。このことは日本が軍事大国化する歯止めとなりましたが、同時に軍や戦争に対する研究をタブー視することにもなりました。政府や自衛隊関連の組織を除くと、つい近年までほとんど研究が行われてこなかったのが実情です。しかし、人類の歴史が示しているように、どの時代の戦争も社会や国のあり方に大きな影響を与え、技術や文化の進化と深く関わってきました。近代の日本もむろん例外ではありません。軍隊は洋食や洋服を日本の社会に浸透させ、近代化の推進の一翼を担ってきましたし、農家の二男・三男といった貧困層のひとびとに社会的上昇の場を与えることにもなったのです。

第二次世界大戦下の日本軍をみても、そこに当時の日本社会のあり方を読み取ることができます。諸外国が軍の近代化を進めていくなかで、日本軍は装備や組織を近代化することができませんでした。組織は、軍の教育機関出身者を頂点とした極端な身分制で運営され、一般の兵士に開かれていたのは下士官になるといふかほそい道だけ、学徒動員兵は消耗品の臨時雇い扱いでした。家制度が厳然として存在していたため、日本には女性兵士は皆無でした。あらゆる人的資源を必要とする「総力戦」へと追い込まれていくなかで、実は当時の日本社会にはそのシステム自体ができていなかったということです。その一方で、

「戦争に勝つ」ために、日本社会には新しい施策が次々と導入され、それが日本を変えることになりました。食糧増産政策は戦後の農地改革へとつながり、女性の勤労動員は女性の社会進出への下地をつくることになりました。為政者や軍隊の意図とはおそらく裏腹に、第二次世界大戦は日本社会を大きく変え、戦後の社会を準備していたということです。

事実を正しく理解することが 国際社会との共生につながる

終戦から60年を経た日本では、日々、戦争の記憶が遠のいています。多くの日本人にとって戦争は「他所事」になっているといっても、過言ではないでしょう。例えば、子どもたちの遊びにも、それが象徴されています。私が子どもの頃は、少年雑誌に戦艦大和やゼロ戦の記事が載っていましたが、いまは触れられることすらありません。男の子に人気だったリアルな兵士のキャラクター人形は、近未来の架空兵器に取って代わられています。

平和であることは素晴らしいことですが、それが戦争に対するリアルな想像力の欠如につながってしまうことは、決して良いことではありません。戦争体験のない人ほど、あるいは戦争に対するリアルな想像力をもたない人ほど、相手に対して不寛容になってしまう傾向があるのです。現実にはいまお世界では戦争の危機をはらんでいる国や地域は少なくありませんし、日本が自衛隊派遣というかたちで関わりをもっているイラクでも戦闘状態がつついています。東アジアや諸国との関係でも、か

戦争という現実と向き合うことで 国、社会のあり方、そして自分自身の生き方を考える



社会学研究科教授

吉田 裕

Yutaka Yoshida

1964年生まれ。1977年、東京教育大学文学部卒業後、一橋大学大学院社会学研究科修士課程入学。79年、博士課程進学。83年、同課程単位取得退学。同年、社会学部助手に。96年、社会学部教授。2000年4月から現職。専門は、日本近現代政治史、日本近現代軍事史。戦争や軍に関心をもったキッカケの一つは、最も戦死率が高い大正10年生まれの父との関係から。若い頃は反発した父だったが、その世代を内面的に理解したいという気持が次第に大きくなったという。

つての戦争の記憶はいまなお色濃く残っており、外交政策等の上で不安定要素の一つとなっていることはご存じの通りです。戦争はイヤ、では問題は解決しません。戦争が起こったという事実や戦争の記憶を捨象したまま、諸外国との相互理解や共生は生まれません。グローバル化がますます進んでいる時代だからこそ、私たちは戦争や軍隊が社会のなかで果たした役割を正しく理解し、それらがなおも存続している背景をキチンと捉える必要があるのです。

私自身も戦後世代ですし、いまの学生の両親もほぼ全員が戦争体験をもたない人たちです。戦争について考え、戦争に対するリアルな想像力を涵養するために、私のゼミでは兵士の体験記や日記、回想記などを活用しています。最前線の塹壕のなかで兵士はどんな体験をし、何を感じたのか、空爆のなかで市民は何を見たのか、そういった「現場」を疑似体験することが、一人の人間として戦争を考えるキッカケとなると思うからです。立場が違えば、当然、歴史観も違います。日本と韓国間で共同作業として歴史教科書の相互批判が始まったように、異なる歴史観に目を開いていくことは、学問の上だけでなく、共生を基盤とした国際関係を築いていく上でもとても重要です。だからこそ若い人たちは、さまざまな歴史観をつきあわせ、その過程を通して社会や国のあるべき姿や自分自身の生き方を考えてほしいと思います。(談)

